



日本記者クラブ
記者研修会

「市町村新聞のすすめ」

菊池由貴子 大槌新聞社代表

2016年8月25日

2011年3月11日の東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県大槌町。菊池由貴子さんは記者、編集、事務経理を一人でこなす週刊新聞「大槌新聞」を発行し、人口1万2000人の全戸に無料で届けている。生まれ育った故郷が被災から復興に向かう長い道のり取材し、記録し、発信してきた。

毎年夏、全国の若手記者が日本記者クラブに集まる記者研修会に菊池さんを招き、被災地で書き続ける「一人新聞社」の役割と意義を聞いた。

大手マスメディアの記者から取材を受ける立場でもある菊池さんは、「自分が生まれ育ち死んでいく町で新聞を書くのは、悲しみも倍だが、喜びも倍です」「記者は冷静でなければいけない、というが、当事者意識を持ってほしい」「なぜメディアに携わるのか」と語った。参加した現場の記者たちは菊池さんのことばに、みずからの仕事の取り組み方を問い直した人も多かったようだ。

題字の下に毎号、掲げ続けるモットーは「大槌は絶対にいい町になる」。旗を掲げること自体に、新聞発行の最大の意義がある、と話した

司会：小栗泉 日本記者クラブ企画委員（日本テレビ）

一般社団法人大槌新聞社のウェブサイト

<http://www.otsuchishimbun.com/>

©公益社団法人 日本記者クラブ

Youtube チャンネル

<https://www.youtube.com/watch?v=nQWxjFORDSs&feature=youtu.be>

司会：小栗泉企画委員（日本テレビ） 記者研修会 1 日目最後のゲストは、岩手県の大槌町の大槌新聞を発行していらっしゃる菊池由貴子代表です。

簡単にプロフィールをご紹介させていただきます。

菊池さんは大槌町出身で、東日本大震災のときに情報不足に陥った経験から、町民の視点からの情報源の必要性というのを感じられて、2012 年の 6 月に大槌新聞を創刊されました。そして、2016 年の 4 月には大槌新聞社を設立。編集、取材、執筆、事務経理、全て一人でなされていて、現在まで週 1 回発行を続けていらっしゃるということです。

きょうは、大槌町のいまの復興の現状についてもお話しいたきたいと思います。地元に着した大槌新聞社、なぜ立ち上げて、どんなところに気をつけて発行していらっしゃるのか、このあたりを中心にお話を伺いたいと思います。それでは菊池さん、お願いいたします。

菊池由貴子 大槌新聞代表 皆さん、初めまして。岩手県の大槌町というところで大槌新聞という町の週刊新聞を書いております菊池と申します。よろしく申し上げます。

まず、5 年前の東日本大震災のときには、きっと皆さんにいろいろと報道していただいたり、ご支援いただいたりしたと思います。この場をかりてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

きょうは被災地域での報道について話してくださいということだったんですが、皆さんプロの方々ですし、私は震災の翌年から新聞を書き始めたとはいうものの、新聞とか書いた経験が全くなくて、本当に学級新聞のような新聞です。素人ですので、皆さんにお話しできるような感じではないんですけれども、私が震災から 4 年以上新聞を書いてきて思うこと、小さい大槌町という町で、メディアをみていて思うことを率直にお伝えできればなと思っております。

人口の 1 割近くが亡くなり、家屋の 7 割が被害 ——大槌町の被害

大槌町の概要から紹介します。大槌町は、岩

手県の真ん中よりちょっと下にある、横に細長い町です。宮城県に接しているところが陸前高田市で、岩手県内では大槌町と陸前高田市が被害の大きかった町として報道されました。

大槌町といえば、役場庁舎が被災して、被災地の中で唯一町長が亡くなった町です。町長はじめ役場職員 40 人の方が亡くなった。役場庁舎の玄関の前で災害対策本部を立ち上げているところを津波に襲われて亡くなってしまった町です。

人口と世帯数ですけれども、東日本大震災で人口の 1 割近い方が亡くなって、家屋被害も 7 割が被害を受けましたので、震災前と後では、人口も 3,000 人以上減っていますし、世帯数も 1,000 世帯減っている状態です。

この写真は応急仮設住宅です。2,106 戸整備していただいて、入居率がいまでも 7 割を超えている状態です。

復興状況ですが、きょうは簡単にお伝えします。ハード整備ですが、大槌町の場合、区画整理事業、盛土をして区画を整理して、土地を皆さんにお返しするという事業、そして防災集団移転事業、津波が来ない安全なところに集団移転して住むという事業をやっています。

自力再建が無理な方のために災害公営住宅も整備しています。当初、国では復興集中期間ということで、震災 5 年、要は 27 年度までで復興しますと言っていたんですが、このとおり、どんどん復興がおくれて、平成 30 年度までかかります。公営住宅は約 1,000 戸整備するんですが、今年度終わってやっと半分できるという状態です。

復興のおくれが、震災から 5 年たったいまでもとまりません。この大槌新聞の先月の紙面ですが、「北側斜面」と書いているのが、防災集団移転の団地の名前です。ここが震災から 5 年たったこの期に及んで 1 年半、18 カ月おくれる、そういったことになっています。

まちづくりの情報を書く報道機関

町の状況は、簡単にここまでとして、大槌新聞をかいつまんで説明します。

大槌新聞を書いた理由です。震災後、町内では情報不足に陥りました。震災で電気がとまってしまったので、携帯もだめ、ネットもだめ、テレビも見る事ができません。情報源はラジオと新聞だけでした。近隣4市町をカバーしていた地元紙もあったんですが、そちらも被災してしまいまして、メディア空白域になった。県紙や全国紙が避難所に置かれるようになって、それを通して町の情報を得ていました。避難所に通って、新聞をもらって、大槌町の情報を得ていたんですが、ありがたいなあと思う反面、なぜか悔しいというんでしょうか、情けなくなっただけです。

私は生まれも育ちも大槌で、震災も経験していて、いまも住んでいる私が、何で震災後に来たであろう記者さんに、町の情報を教えてもらわなければならないのかと、なぜか悔しくなっただけです。ということで、町の新聞をつくりたいと思うようになりました。

まず1つ目が、復興の様子を町民みんなで共有したいと思ったんです。復興の様子といいましても、先ほどのようにハード事業ではなくて、津波に襲われて、その後の火災で焼けただけの町に、飲料水の自動販売機がある日ポーンと置かれていたんですね。1台が2台になり3台になる、そういったことがすごく復興の大きな一歩に思えて、自動販売機が置かれただけで、町の皆さんに知らせたくなった。

あと、復興情報、初めは防潮堤の高さは何メートルにします、防災集団移転します、まちづくりどうしていきましょう。そういった復興情報はいっぱいあって難しいです。専門用語もありますので、そういうのを知るのを諦める町民が見受けられました。です、わかりやすく伝えないと住民主体のまちづくりができないのではないか。そういった思いもあったのと、あくまで新聞を出すには、エンタ（エンタテインメント）ではなく、報道機関でいようと思えました。

震災後、ミニコミ紙が結構できたんですが、イベントだったり、町外から来た支援団体の支援情報だったり、あとは町内外問わず、有名な方のインタビューというんでしょうか。平時な

らいいんでしょうけど、やっぱり皆さんが知りたいのは生活情報、再建情報だと思えたので、花が咲いたとか、そういったのはもう次の次だろうということで、必ずメインにはまちづくりの情報を置こうというのは初めから決めていました。

概要ですが、いまは町内5,300世帯に全戸無料配布をしています。初めから全戸無料配布をできたわけではありません。震災翌年に創刊したんですが、私は地元の復興支援団体に所属してましたので、最初は団体の事務所のコピー機で、カラーコピーが高いと言われてたものから隠れて数十部印刷して配ったり張ったりしてました。その後、支援の方から10万円いただきまして、それをきっかけに印刷を業者に委託して、そこからいまに至るという感じです。

「メディアの芽生え」ということですが、震災後の大槌町は、一度はメディア空白域になったんですが、町内にある別々の団体で、大槌新聞や臨時災害FM、ネットや映像などといった「町のメディア」が次々と生まれました。

メディアミックスから一人新聞社の設立まで

この写真は私なんですけれども、新聞をラジオで読む機会をいただいて、新聞の読み聞かせなどをしていました。目の悪いおばあちゃんなどには結構好評で、メディアミックスすることで、より効果的な情報発信ができるのではないかなと思うようになりました。

各団体ばらばらで、国の緊急雇用助成金を使っていましたので、いつかは切られる、だったらメディアミックスすれば効率的な経営もできるんじゃないかという思いもあって、さらに行政との連携もできるのではないかなと思えました。

この写真が碓川豊前大槌町長です。この方はネット大好きで、マスコミも好きな方です。行政改革や情報公開もされていた方ですが、この方がこうおっしゃったんですね。「行政にとって耳の痛いことを言うメディアが必要だ」と。

私は、この碓川町政のもとで新聞を始めたので、「そんなのは別に当たり前じゃないか」と思ったんですが。

こういった条件がそろったので、「大槌メディアセンター」ということで、民間レベルでのメディアミックス、さらには行政と連携をした組織の受け皿になるべくメディアセンターという団体を民間側で立ち上げました。

その一環として、4月には別々の団体で運営していた大槌新聞と臨時災害FMが連携したのですが、行政サイドでも、そして民間サイドでもなかなかうまくいかないなあと思っているときに、——この写真が、いまの平野公三新町長です——去年の町長選挙で、町長がかわりました。この方が「事業の選択と集中」、要は「事業を見直しして復興を加速させますよ」ということを公約に掲げて当選して、事業見直ししましたよとなったわけです。何が見直されるかと思ったら、新聞とFMの事業廃止が決まってしまったということで、事実上、メディアセンターという構想自体は断念せざるを得ませんでした。

ただ、そうは言っても復興はまだまだ道半ばです。住民主体のまちづくりはこれからが本番です。メディア空白域に戻すわけにいかないということで、ことしの4月に大槌新聞社を設立しました。

それまでは団体に所属していたので、自分は新聞だけ書いていればよかったですけれども、事務経理や広告受付も一人でこなす、文字どおり「一人新聞社」で、4月から活動を続けています。

大槌新聞を続ける意義とは

① 共有したい復興の理念

大槌新聞を続ける意義は何だろうかと自分で考えてみたんですが、3つあると思っています。

1つは、当然、復興の情報がまだまだ必要だということ。あと、これが意外と見落とされがちなんですが、復興の理念。これも共有するべきだと、日々の取材で感じます。例えば、大槌

町が1つの船だとした場合、震災で沈みかけた、難破船状態だとしたら、どこが壊れたから修理しますよ、乗組員が何人いなくなりましたよという、復興情報も必要なんですが、そもそも、この大槌丸という船の船頭さんが、今後、新しい大槌丸はどこに向かっていくんだということ、要は町長が決めますけれども、その町長の思いが乗組員に伝わっていないと、めいめいが頑張ってもちぐはぐな復興に終わってしまうし、みんなの頑張りが無駄になってしまう。なので、例えば町長が右左のうち、左と言ったら、議論をしたうえで「そうだね、左だね」ということで意識を同じ方向に向けて頑張らなければならない。やっぱりそういった理念は復興情報の中でも必要だろうと思っています。

ただ、いまの町長は、なかなか理念がみえない方なので、毎月の記者会見でいろんな質問をぶつけて、町長の考えをひたすら新聞に載せて住民に提示しているつもりです。

大槌新聞の意義 ②町全体を俯瞰し地域課題を取り上げる

2番目の、地域課題の取り上げ。いろいろありますけれども、復興庁もそうだという話を聞くんですが、大槌町全体を見ることができる方が意外といないと感じます。いくら町長でも、役場職員でも、官民間問わず町全体を俯瞰できる方がいない。取材をしていると、ある程度官民の情報に接することができますので、いろいろ諸課題は山積しているものの、いまこれが一番大事だろうというのが何となくわかるんですね。いまは皆さん考えが及ばないかもしれないけれども、これは大事だよ、というところもあるので、いまは賛同を得られなくても、たまに載せたりはしています。

大槌新聞の意義 ③「大槌は絶対にいい町になる」と旗を掲げる

この赤字で書いた③「大槌は絶対にいい町になる」と宣言する、これが大槌新聞を続ける最大の意義だと思っています。新聞の題字の下に

いつも掲げているんですけれども、うちの町では、震災で家族も家も流された住民が多く、役場職員さんもどんどん疲弊してきています。心が折れそうになってくる。だけれども、あれだけの被害を受けた町がいい町にならないはずがないと私は思っています。絶望の中でも希望のともしびみみたいな旗を掲げる方が大槌町にはいないので、せめて新聞にだけでも掲載する。これは毎週発行するので、サブリミナル効果じゃないですけれども、暗示にでもかかって「ああ、この町、いい町になるんだ、いまは大変でも」と少しずつでも思ってもらえればと思って、たまに外したくなるときもあるんですけれども、掲げ続けています。

大槌町を軸に興味広がる

最後に、「報道とは」という題名にしたのですけれども、4年間書いてきて思うことを説明したいと思います。

いままでいろいろ言いましたけれども、私、震災前は、メディアや政治というものに全く無関心で、大槌町の町長が誰なのかとか、議員が何人いるんだとか、全くわからない。わからないというよりも、無関心でした。ただ、震災後に、この町をよくしたいなと思ひまして、例えば高校生であれば、「美容師さんになる」とか、「自衛隊になる」とか、いろいろ夢をみつけたようなんですけれども、私の場合は、なぜか、「情報って必要だよな」と思ったんですね。なので新聞を創刊しました。

この町をよくするために新聞を書いていると、日ごろは町内での取材がメインなんですけれども、例えば何か課題が出てきたとき、大槌町の隣が釜石市なんです、「あれ、この課題って釜石市ではどうやっているんだろうな」とか、比較したくなってきて、時々、釜石市に取材に出向いて、「釜石市ではどうされていますか？」という取材もするようになりました。

あとは他県で、宮城県の山元町で、おとしですかね、町長選になるようだと聞きました。去年、大槌町で町長、町議選が同時選挙だったので、公示日に山元町に出かけました。あと、

他国ということで、ことしの3月にご縁をいただきまして、日本・トルコ文化交流会から賞をいただきました。それまで世界のことに全く興味がなくて、でも、トルコについて最低限知らないといけないなと思っていろいろ調べたら、ご存じのとおり、トルコって、政治的にもちょっといま大変で、テロなんかもあって、ちょうど受賞式があった翌日に、トルコの手新聞が政府の管理下に置かれたということを知って、すごくショックを受けたのです。

その受賞式のときにトルコの女性に声をかけられて、その方に後でメールを送ったところ、「トルコはいま大変だけれども、絶対にまた前のようにいい国になると思っています」というお返事をいただきました。震災で復興がおくれているとか、いろいろ大変だなと思って日々過ごしているんですが、それとは本当に桁違いな大変さをしながらメディアをやっている方々もいる、そういった国もあるんだということに改めて思いました。大槌町を軸にして、だんだんにおかげ様でご縁をいただいて興味が広がった、そういった状態です。

マスメディアの記者と話すと、大きな組織って大変そうだ

素人新聞を書いている私から、マスメディアをみると、大きな組織って大変そうだなあと思います。仕事自体が大変だというよりも、組織として、例えばトップと現場の考えの違いだったり、あと、経営の面もそうなんでしょうけれども、大きな組織は大変そうだなあと感じますし、想像力がない方が中にはいるんだなあと思います。

ことし、東京でメディア関係の方と何人かであつたときに、ご遺体の話をし出したんですね、私以外の方々が。多分、震災でカメラにご遺体が写ったという話から始まったと思うんですけれども、それをずっとしている。震災のときに、私、いろんな話を聞いているものですから、何か嫌だなあと思っていたんですが、どんどん話が展開して行って、過去の何とかという事故ではこういうご遺体があって、と。冷静という

んでしょうか、むしろ喜々として話されているんですね。さすがに私は「ちょっともうやめてくれ」と言ったんです。メディアは冷静でなければならないとよく言いますが、こういった方々がメディアをしていること自体が、すごく怖いと思いました。嫌悪感よりも、すごく恐怖を感じたのと、あと、やっぱり当事者意識がないんだなあと思います。

他人事で当事者意識がない方が多い 何でメディアを志望したのだろう

皆さん出身地じゃないところでメディアをされたり、あと、持ち回りで2年いたらもう交代するという感じなんでしょうけれども、どこかやっぱり他人事。例えば何かあっても、「しようがねえなあ」みたいな感じで当事者意識がない方が多い。この人って、何でメディアをやっているのかなあと思う方が、中にはいます。

メディアをやっているということは、その人なりの理念や、メディアに携わるきっかけや大変なことをはね返すだけの原動力も必要になってくると思うんですけども、どうも話をしても、明確にみえる方が少ないのかなと感じます。

99 人がおかしいと思っても修正できずに暴走しがち

いま政治もメディアも、いろいろ大変なようにみえます。政治もメディアも、大きくなり過ぎると、政治であれば有権者の方メディアで言えば、読者・視聴者ですが——現場から離れてしまうんじゃないかなと思います。

大きくなった組織のごく一部の方が、権力というのをはき違えて、暴走しがち。で、一回そうなると、例えば100人の会社で1人がそうだとしたら、99人がおかしいだろうと思っても、何となく修正できないというか、怖いなあと思うんですね。

大槌町は、1万2,000人の町です。ほんとに

小さい町で、町民からすれば私は大槌新聞の菊池さん、私からすれば三浦肉屋さんとか、越田金物屋さんとか、みんな役割がすごくみえるんですね。本来、政治とメディアというのは、地域をよくするため、国民、町民、市民のためにあるものだと思います。それが大きくなり過ぎると、いつの間にかメディアのためのメディア、政治のための政治になってしまうようにみえる。

私たちは何のために政治をやっているんだ、メディアをやっているんだというところは、常に顔の見える関係でいけば、意義を失いにくいのではないかなと思っています。

理想論かもしれませんが、そういうふうに思います。

常に顔の見える関係で書く市町村新聞なら、喜びも倍に

全国紙や都道府県単位の新聞は結構あるんですが、市町村単位の新聞となると経営的にも大変じゃないですか、一人でやるのも大変じゃないですかと言われるんです。けれども、やはり市町村単位の新聞、大槌町なら大槌町の視点の新聞、隣の釜石市なら釜石市の視点の新聞、そういったものがふえると、メディアの底辺が広がって、すごく世の中もよくなるんじゃないかなと思います。

ですので、例えば皆さんの出身地、もしくはいま住んでいるところやついの住みかになしようと思っているところ、そういったところで、定年後でも構いませんし、早期退職の話も聞きますので、ぜひ市町村新聞というのをやっていたら、すごく楽しいです。

自分の生まれ育った町、自分が死んでいく町の新聞を書いているというのは、悲しみも倍ですが、喜びも倍です。ですので、「市町村新聞っていいですよ」というところを頭の片隅にでも置いておいてもらえればいいんじゃないかなと思います。

素人の私がプロの皆さんに言えることはこれくらいだと思うので、以上で私からのお話は終わります。ありがとうございます。(拍手)

< 質疑応答 >

司会 ありがとうございます。

私も働き始めてからずっと報道ですけれども、何で報道に携わって、こういう仕事を続けてきたのかなということをちょっと自問自答しながらお話を聞かせていただきました。

会場の皆さんから質問をいただく前に、幾つか、お話を伺えればと思っています。

まず、菊池さんご自身も被災されているんですよね。

菊池 私は、家が高台にありましたし、家族は亡くなっていないので、そういった意味では被災者ではなかったです。

司会 何か、津波で慌てて逃げて……

菊池 隣の釜石市に地震があったときにいて、そこにいれば大丈夫だったんですけども、こういう非常時には、なぜか町に帰らなければならぬと思ってしまって、車で大槌に向かっているときに津波が道路に来てしまって、急ブレーキをかけて止めたところがたまたま神社の高台につながる階段の前で、ひたすらそこを駆け上がった、という経験はあります。

自分の町の情報を人に頼むのは悔しい

司会 それで、翌年、新聞を出されるまでの間、町の外から来る人に情報を教えてもらうことが悔しかったと先ほどおっしゃっていましたが、どうして悔しいと思われたのか。町の外から来る人が発信する情報が、自分たちが欲しいものとずれていたから悔しいと思われたのか、それとも、自分たちの町のことは自分たちの手で伝えたいという思いからなのか、どうだったんでしょう。

菊池 そのときは後者のほうですね。自分の町のことを人に頼むしかない状況というんでしょうか。初めはそういうふうに思いました。時間がたっていって、全国や県紙の報道をみると、当然全国紙は国民に対しての新聞ですし、県紙は県民向けの新聞なので、視点が全然違います。そういった意味でも町民目線の新聞は必要だ、というのは後になって感じました。

司会 ありがとうございます。

質問 私もNHKという組織にいて、力強いメッセージには、本当に考えさせられるお話でした。ありがとうございます。NHKであれ、全国紙であれ、ローカルの地域向けの放送や地域版の新聞を出していますが、大槌町で、どういう点が、放送には足りていないとお感じになっているか。あと、大槌町といった小さい単位のところ、先ほどおっしゃっていたメディアミックスの可能性としてどういうことが考えられるのか。お伺いします。

菊池 先ほどスライドでも出しましたけれども、役場庁舎、いまは使われていないので、「旧役場庁舎」と私たちは呼んでいるんですが、その旧役場庁舎の保存、解体という問題があります。碓川前町長は保存でやっていたんですが、いまの町長は解体です。残す、残さないという議論があるんですけども、国や都道府県の報道だと、当然全国目線、岩手県だったら岩手県目線でみますので、震災遺構、震災を忘れないというところで、保存、解体の議論がされるように思います。

ただ、「震災遺構」と一口に言いましても、私たちにとっては、あそこは強烈に反省しなければならない場所です。亡くなった話というのは美談にされがちですが、それは違うだろうと思うんですね。役場職員40人が亡くなったというのはあり得ない話です。一般町民が40人亡くなるのと、役場職員が40人亡くなるのは全く違う話で、住民の命と安全を守るための自治体職員自身が亡くなってしまったということは大いに反省すべきで、でもあれは役場職員さんだけが悪いんじゃないくて、町全体で反省しなければいけない。

なので、私たちにとって旧役場庁舎は震災遺構というよりも、亡くなった方を悼む場であり、思いを共有できる場というんでしょうか、追悼の場というんでしょうか。住民が、もうあんなこと二度としませんと。常に見ることで、苦しいけれども反省する場、亡くなった方を悼む場なんです。同じ残すという議論でも視点が全く違います。

基礎情報を持たず、シナリオを決めつけて取材する記者が来る

あと、全国紙さんも都道府県単位の新聞もそうなんです、この前、震災5年ということで、一斉にメディア関係者がバーッと来て、私にも話を聞きたいと来たんです。復興がおくれているのも問題なんですけれども、何でおくれているのかとか、例えば今度どこかで同じようなことが起こった場合、そうなっちゃだめだよねということで、例えば復興庁のあり方はどうなんだとか、国、県、市町村の連携はどうあるべきとか。美談だとか、悲しい、かわいそうだとか、復興がおくれているだけじゃなくて、皆さんのそれぞれの所属する場所で起こってもおかしくないわけですから、そこにつながるような報道というんでしょうか、もう少し踏み込んでもらえればなというところもあります。

全く震災を知らない方が、基本的なことすらわからないで入ってくる方がいて、その割には、シナリオじゃないですけれども、こういうのを撮りたいというのを決めてくるんですね。なので、そこは違うんですよ、とは言うんですけれども、やっぱりそういう報道になってしまう。

なので、一般住民の方も取材には応じますけれども、二度と受けたくないという方も中にはいましたので、ぜひ、被災地、知らないなら知らないでも、ネットでいろいろ調べればわかるわけですから、最低限の基礎情報だけは知って、かといって決めつけないで来ていただきたい。一度は来ていただいて、時間もないんでしょうけれども、現状がどうなんだということをしっかり知ってほしい。そのうえで現状はこうだ、と伝えるだけではなくて、私たちの町や県で起こったらどうなんだという報道をしていただきたいです。

あと、メディアミックスの可能性でしたか。

1万2,000人の町で、メディアミックスという考えは、私はまだ持っています。ホームページを立ち上げて、一応ページとしては音声でも、例えば町長の記者会見を全部流すだとかしたいなあとは思っていますけれども、ちょっと新聞を書くのでいっぱいいっぱいできない。

だけれども、1万2,000人という小さいパイの中で、やる気と能力のある方がいるかどうかですかね、経営的なところもあるので、人を何十人も雇えるわけでもないの、それでも考え方自体は間違っているとは思っていません。

司会 ありがとうございます。規模の大きなメディアがいい、悪い、小さい単位のメディアがいい、悪い、おそらくそういうことをおっしゃっているのではないでしょうね。基本的に、私たちマスメディアの人間も、東日本大震災の後、防災報道とか、そういったことをどういうふうに地元密着型でやっていったらいいかということ、それぞれの会社で模索しながら積み重ねていっていると思います。でも、やっぱり何か起きたときだけになりがちだったりとか、ステレオタイプなものになりがちだという思いを現場では感じられたということなのかなと思います。

復興の遅れは一つの理由ではない

質問 きょうは、みずからの日々の取材姿勢も含めて、非常に考えさせられることの多いお話だったと思います。貴重なお話、どうもありがとうございます。

私も、震災5年に合わせて被災地の取材をしたのですが、復興庁に伺っても、町に伺っても、何が一番課題なのかという全体像を誰も把握していないと感じました。いま何が大事なのか、町全体をみているとみえてきたとおっしゃったんですが、いま何が一番大事だと思われるっていて、なぜそれがみえてきたのか、お聞かせください。

菊池 「復興のおくれ」と一言で言えますけれども、一つの理由ではないと思っています。国が悪いとか、県が悪い、大槌町が悪いという単純な話ではなく、すごく複雑だと思います。そもそも大槌町で40人の職員が亡くなったというのは、大きい問題だと思っています。

派遣職員さんを多くいただいています、大槌町の地区名を覚えることから始めて、2~3ヵ月、長くて1~2年で交代して、また新しい人が来てということをしている。

あと、国といっても、いろんな理由があるんでしょうけれども、復興庁が、いろんな省庁からの寄せ集めだったり、復興庁のあり方は、もっと議論すべきだと思います。私も復興庁のここが悪いというのは、取材しているわけではないので、その裏の事情まではわかりませんが、例えばこれだけ関東で地震があるかもしれない、南海トラフがあるかもしれない、まして原発との複合災害だと騒いでいる割には、だったら復興庁を常に災害庁でも災害省でもいいので、置いておく。自治体、県の派遣職員さんもよく言われますが大槌町での経験を持って帰っても、その引き継ぎがなかなかうまくいかず個人のもので終わってしまったたり。

国としても、常時、何も無いときには過去の災害から学ぶようなことをして、何かあったら省庁の寄せ集めでその場しのぎで終わるんじゃないくて、えいっとそのままの体制で行けるような。それにはやっぱり国と県、町の日ごろの関係づくりもすごく必要なのかなと思っています。

大槌町は閉鎖的な町で、国や県とのパイプがなくて、結構大変だったんですけども、もともと何かで縁のある市町村は、その縁で支援をいただいたりしたと聞いています。そういった国としての復興庁みたいな組織のあり方、あと、国と県と町——私たちの町でも今年3月まで、国交省から大水敏弘副町長という方が出向されていたんですけど、ふだんから国の官僚と市町村レベルでの交流をしたほうがいいのか、と思っています。

質問 私も取材者として、身を律するような思いで聞いていました。

その点で、この4月に熊本地震がありました。先ほどメディアに対する厳しい視点でのご意見もありましたけれども、今回の熊本地震の報道について、何か感じるものがあれば教えていただきたいところがあります。

例えば、地域密着でさまざまな情報が欲しいという要請をきちんと私たちメディアが受けとめていたのかどうか。さらには、連日、テレビも現場に入って中継をされていて、時に被災者

の方に不愉快な思いをさせてしまうようなことがあったりとか、そういったものがツイッターで幅広く広がって、また違う形で報じられたりとか、そういったことも散見されました。今後、災害が起きたときにあるべき報道の姿ということをお教えいただきたい。

もう一点、大槌新聞が創刊されて数年がたっていますけれども、5年後、10年後に、どういった新聞になっていることが夢なのか。いまお一人ですが、賛同者がふえて、地域が広がり、部数も広がるという思いがあるのか、それとも一人でやっていきたいのか。

継続して地震報道に当たる記者を

菊池 ありがとうございます。

まず熊本地震についてですけれども、最初に思ったのが、私たちの東日本大震災の教訓を次に生かさなければと思いつつも、あまりにも早かったというんでしょうか、私たち自身もまだ復興という段階に至っていないので、何か教訓が残せているのかなと、すごく気になった思いがありました。

私たちのときもそうだったんですが、最初は、ひたすら被害状況を伝えること、あと、亡くなった方の情報や、避難所支援、そういった情報ですかね。

テレビをみても、新聞をみても同じですよ、被災状況というのは同じですから。それはそれとして、これから起こるであろう震災や原発事故を、さっきは復興庁の話をしましたけど、メディアの中でも、災害と災害をつむぐような方がいればいいと思います。ずうっといって、情がうつってだめだとかではなくて、一人でもいいから、誰かずうっと継続して見ている。そうすると、東日本大震災と熊本地震の比較もできずし、あ、ここでも同じことが起こっているな、じゃ、これって次に起こったときにも問題になるよだとか。

社内でもいいですし、地方紙の集まりの何かでもいいですし、そういう方がいてくれると、被災地の人間とすれば、わかってくれる方が来ると、すごく話も通じやすいです。新人の方を

投入するのもいいんですけども、定点でみている方がいるというのは、すごく必要ではないかなと。

何度も言いますけれども、役場職員も、メディアも、震災で得られた知識を個人としての財産で終わらせずに、共有知というんでしょうか、震災で得た教訓をつむぐような何か、報道のあり方というよりも、組織のようなものがあればいいのかなと。

復興が終わったら終わる新聞ではない

あと、大槌新聞の将来ですが、「復興が終わったらなくなるんでしょう」と言われるときもあるんです。全然そんなことはなくて、とりあえずいまは復興情報をひたすら伝えています。ハードが終われば、今度はソフト。もうとっくにソフトのほうに移行していなければならぬんですが、できた器の中で、どういったまちづくりをしなければいけないのか。どんどん情報が必要になってくると思います。

情報の中身も変わります。いまは「公営住宅がいつ、どこにできますよ」がメインなんですけれども、ハードが終わればソフトの報道が必要になるし、多分そうなる、各市町村との比較もすごく必要になってくるんじゃないかなと思っています。

もう一つが、私を含め、震災後生かされるための最低の条件というんでしょうか、やらなければならないことは、やっぱり震災検証だったり、震災遺構をどうするのかを考えたりしなくてはいけない。うちの町では震災で亡くなった方々の全員の生きたあかしを残そうという取り組みをしています。亡くなった方々がいることで私たちが生かされているので、いまは結構見落とされがちなんです。それはこの町の核だし、それができなければ、この町の存在理由がないぐらいに思っています。いまは復興でいっぱい、住民はそこまで頭が回らないようなんですけども、そういったところは、長期的な報道というんでしょうか、いまは細々とでも、ずうっとやっていかなければいけないなと思うところです。

少子高齢化や、例えばこの前、中心市街地に計画の半分以下しか住民が戻ってこないということがわかって、次から次と課題が出てきています。各市町村との比較も必要になってきます。被災地外でもこういった取り組みをやっているとすれば、行って見て、各市町村ではこういうことをしているところもありますよ、と、役場職員さんや、議員さん、住民にも伝えることができればいいのかなと思っています。

ですので、復興が終わったら終わりという新聞だとは思っていません。

メディアも政治ももうからないのが当たり前

司会 伝える側の体制として、なるべく人数を増やしていきたいのか、それとも、基本は一人で、ということなのか、そのあたりはどうでしょうか。

菊池 もちろん、志を同じくする方がいれば一緒にやっていきたいと思う反面、細々とやっていくメディアだと思っているので。メディアというのは、政治もそうあるべきだと思うんですけども、もうからないのが当たり前というか、仕事の意義からして。なので、雇いたい方、一緒にやりたい方が出たとしても、経営的なところもしっかり考えていかないと、思いだけではやれない部分もあるので……。

質問 お話の中で、マスメディアのあり方として、震災の3.11が近づいてきたら、3県に入って取材して、3月12日過ぎたらいなくなるという、かなり強いお言葉をいただいたかと思えます。私も、2013年と14年に同じように2週間ぐらいいて、帰って記事を書くことをやってきたので、すごく耳が痛い言葉でした。

その一方で、おそらくここに来ている各社ともまた、2017年の2月になったら、今度は誰々行け、と同じようなことをやって、その部分はすぐ変えるのは難しいかと思えます。記者が被災地に入る前に、最低でもこういう知識は持っておいてくれ、こういう心構えで来てくれということ、取材を受けた側として思うところ

があったら、教えていただけないかと思います。

テクニックより当事者意識で取材する

菊池 ありがとうございます。

お話ししたのは、何も被災地に入ってくる記者さん個人が悪いと言っているのではなくて、被災地に、1年、2年という節目で来て、報道してもらっただけでも本当にありがたいという面もあるんですけれども、例えば5年たっても復興が終わっていない、来年だったら、また終わっていないと報道して終わりなのか。いまネット社会ですから、ある程度基本的な情報は集められるんです。テクニックというよりも、やっぱり当事者意識なんだと思います。

私も震災前は自分の町どころか、世の中に対して無関心で、大学のときに阪神大震災があって、映像でみて「わあ、大変だ」と思っただけで、正直、それ以上、何も思いませんでした。だから、ボランティアに行くわけでもない、これが大槌だったらどうしよう、なんて一つも思いませんでした。けれども、やっぱり自分が東日本大震災を経験して、そこでスイッチが入ったというんでしょうか、当事者意識を持てたんですね。

取材をしていて、国と地方の関係というのを感じるんですね。そうなってくると、福島や沖縄の問題だったり、あと戦争ですよ。国と地方の関係というのが、それぞれお題目は違うんだろうけれども、根っここの部分は同じなんじゃないかと思って、トルコの話もそうなんですけど、やっぱりあすは我が身。

例えば原発だって、原発があるところは、日本全国たくさんあるわけで、福島は、汚染水が、この前の大雨で流れたとか、やっていますが、なかなか大きいページに出てこない。何となく定期的に出てくる、ああ、うまくいっていないのか、みたいな記事でしか上がらない。沖縄も福島も原発もそうですが、国がいま地方にとっての態度は、あしたにでも、きょうにでも、自分たちに向けられる可能性がある。

テクニックというよりも、当事者意識だと思います。自分の町だったら、これってどうだろ

う。自分がそういう思いをしたらどうだろうと。私も震災を経験してその思いが生まれました。そういう経験をしないとなかなか難しいと思うんですけども、ぜひメディアの方には、神経を敏感に、過敏なぐらいでいていただきたいんですね。

被災地報道でも「情が移っては終わりだよ」とか、「冷静にやるのがメディアだ」と言う方がいたけれども、そんなことは全然なくて、やっぱり当事者意識を持つべきだと思う。メディアはその人にとって大事なものを守るためであるべきだと思うし、当然、記事にするときはそれ以上の冷静さを持ち合わせなければなりません。喜怒哀楽を一般の方よりも敏感にしつつ、日々取材していただければ。何のためにメディアがあって、何のために政治があるのかというところを、ぜひ一度考えていただきたい。

当事者意識というのは、要は皆さんがふだん情報を届けている方々のためなんだということ。常に意識して取材をすれば、もっともっと違った取材になると思います。

司会 当事者意識というのは、経験者じゃなければ発信できないということではなくて、——それだと、例えば戦争を経験した人じゃなければ戦争のことを言てはいけないうのかとか、被災した人でなければ震災報道できないのかと、そういうことではなくて——、きっと、先ほどのお話の中にもあった想像力といったところをどれだけ働かせられるかということなんでしょうかね。

菊池 はい。

質問 お一人で全てやっていらっしゃるということで、我々のメディアの仕事からすると、きょうはどんなニュースを伝えたらいいのか、何を1面のトップに持っていったらいいのか、ニュースの格付けについて日々すごく悩んでいます。どうやってこれを1面に載せようとか、何を伝えようとか、ニュースの判断は、どのようにされているのでしょうか。顔の見える関係だからこそ、町民が知りたい情報は、菊池さんが思っていることとシンクロして同じ、と考えていいのか。それとも、菊池さんが伝えたいこ

となのか、ふだん取材をする中で、町民から聞こえてくる声を反映して紙面づくりをされているのか、その辺、伺えたらと思います。

生まれ育った町なので、町民の声は無理なく聞こえてくる

菊池 後半のほうの質問から、自分一人か、町民の声かという質問ですが。1万2,000人の町で日々生活をしていると、町民の声というのが無理なく聞こえてくる状況にある。

取材というよりは、お茶飲み感覚みたいな、役場の方や住民と立ち話したり、取材と構えることなく記事を書いています。

そこは無理なくバランスとれているのかなということですか。

あと、トップ記事だとか、よくその質問は聞かれるんです。

何を取材していいかわからないという方がいらっしやっただけですね。取材へ行ってこいと言われるんだけど、何を取材していいかわからない、もしくはどれをメインに据えればいいかわからない、同じような質問だったと思うんです。それは、やっぱり当事者意識というんでしょうか、何が大事か、何を伝えたいかというのがあれば、自然とそういうのは整理されるんじゃないかなと思います。

週刊新聞なので1週間の出来事を書きますけれども、どれをどこに持ってこようかと悩んだことは一度もないし、例えば来週これがあるとなれば、「あ、これはメインだな」「これは2面、3面だな」というのは、3面しかない新聞なので——優先順位をつけるのに困ったことはないです。

いま、よく新聞が読まれなくなっている、活字離れだと言いますが、そんなことはないと思っています。ネットですればいいだろうみたいな、極端な人は新聞がなくなるという人もいますが、中身次第だと思っています。自分が伝える相手が欲している情報を届けるように工夫すれば、もっともっと新聞は読まれると思います。ただ、詳しく載せればいいのか、地域の人々に迎合するようなことを書けばいいという単純な話ではないし、そこ

はバランスだと思うんですけども。

繰り返しになりますが、「大槌をいい町にするんだ」「そのためにはどういう記事を書けばいいのか」、そういうことで私の場合はやっているの、何を取材したらいいかと思ったことはないです。

司会 ありがとうございました。

まだまだいろいろお伺いしたいことが皆さんあるかと思うんですけども、菊池さん、この後の交流会にも参加して下さるといことですので、そちらのほうでも引き続きお話をいただけたらと思います。

日本記者クラブでは、お話をいただいた方にメッセージと署名をしていただいているんですけども、先ほど菊池さんにもお書きいただきました。こちらになります。大槌新聞を発行するその目的の一つですね。

「大槌は絶対にいい町になります」とお書きいただきました。

最後にお伺いしたいんですけども、毎週新聞を出して、いまのほうが大槌町はいい町になっていますか。

菊池 なる方向には行っています。いろいろありますけれども、これも過渡期だと思っています。一朝一夕に、震災があったからいい町になるわけではなくて、落ち込むときもありますけれども、20~30年、本当に長い目でみて、絶対いい町になるという確信はありますので、日々、取材を続けて、新聞を発行できればなと思っています。

司会 ありがとうございました。（拍手）

（了）



（大槌新聞社のサイトから）